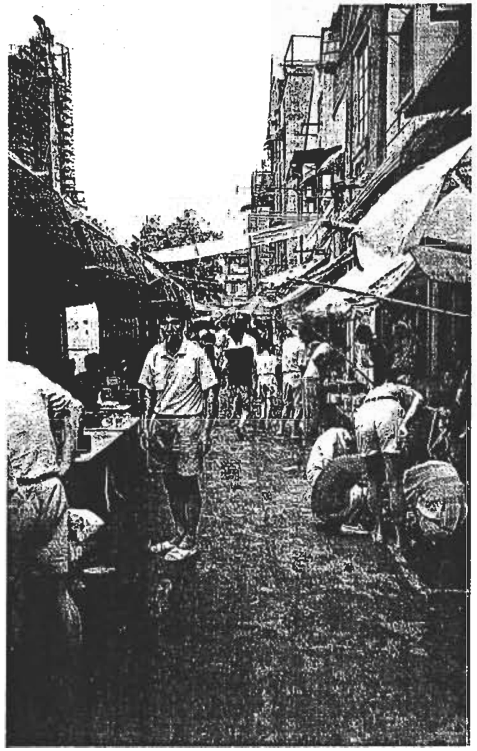
フィールド日記

上海の闘コオロギ

菅 豊 Yutaka Suga

上海の暑い夏が終わると、コオロギたちの熱い闘いが始まる。
中国近代化の荒波に最先端で洗われ



文廟花鳥魚虫市場

ている上海は、いたるところで建設ラッシュ。古い建物は取り壊され、つぎつぎと背の高いビル群へと姿を変えている。それでも、旧植民地時代から中国人の居住地区であった旧上海城の一帯は、いまだ解放以前の建物を数多く残している。この旧上海城のなかでも文廟路（ウェンミャオルー）は、かつての下町風情をもっとも色濃く残した街であろう。ここでは露天の小吃店（シャオチーディエン）（簡単な食べ物屋）にまじって、おもちゃ売りや日用雑貨を売る小店がひしめいている。その小店に隠れるようにして、出所のわからぬ骨董品を売るいかがわしい売り子が、金をもっていそうな客に声をかけている。そんな猥雑な路地の一角に、文廟花鳥魚虫市場はある。

コオロギの品定め

ここには、その名のとおり盆栽、切り花などから金魚、鑑賞鳥までが所狭しと並べられている。いわゆる、ペットショップ街であり、上海にはこんな市場が十数カ所ある。幅約三メートル、奥行き約一〇〇メートルの小さな路地だが、夏も終わりに近づくと、コオロギ売りとそのコオロギを買い求める人びとでごった返す。コオロギ一匹、安いものは一〇元（一元は日本円で約一五円）程度、高いものになると一万元に達するものもある。都市住民の平均月収が六〇〇～七〇〇元であることからすれば、とてつもない値段である。

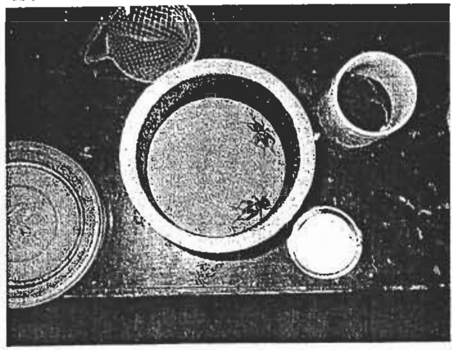
八月にはいると、中国各地から名うてのコオロギたちがこの街へとやってくる。もちろんもってくるのは人間で、コオロギの行商人である。日本人の私でもちょっと聞いたらわかるような北方訛りで、明らかによそ者が多い。なかには入れ墨などを背中や足に入れた、風体よろしからぬ兄さんたちもいるが、

菅　豊　すが　ゆたか　1963年生。北海道大学文学部助教授。民俗学。現在、日本および中国浙江省などをフィールドとし、東アジア農耕社会におけるヒトと動物の関係史を、家畜飼育や平地性鳥獣狩猟などを素材に調査研究中。「「水辺」の技術誌——水鳥獲得をめぐるマイナー・サブシステンスの民俗知識と社会統合に関する一試論」『国立歴史民俗博物館研究報告』61、「都市とムラの水鳥」『ひとと動物の近世——つきあいと観察』など。

『エコソフィア』No. 1　1998年5月
民族自然誌研究会、昭和堂

品定めをする客

闘うコウロギたち



上海っ子は気後れすることなく、丁々発止と駆け引きしている。

こんなときは子どもだって負けてはいない。コオロギの入った容器の蓋を一つひとつ開けては、その力量を見極め、品定めする。手には「草」というコオロギの挑発道具をもち、これでコオロギの頭や触覚をくすぐって、その反応をみる。牙をむき出しにして向かってきて、さらに雄叫び（?）を上げる猛者もあれば、あわてて逃げ出すものもある。値段が馬鹿にならないから、買い手は真剣そのものである。たいていの上海っ子なら、コオロギに関しては一家言もっており、海千山千の行商人とはいえ、そう易々と売り払うわけにはいかない。

コオロギの飼育文化にみる漢民族の自然観

古くより中国では、都市化にともなう自然の消失とは裏腹に、人為的な自然を都市空間へ新しく導入する文化的風土が存在した。経済的に裕福な人びとのあいだでは、山水を模した園林文化が広まり、擬似的自然が愛好されてきた。また、一般都市住民も、盆栽や飼い鳥、観賞魚など小型で手軽な栽培・飼育技術を生み出すことにより、擬似的小自然をその生活に導入する文化を培ってきた。これが花鳥魚虫文化であり、コオロギの飼育文化もその範疇に含まれる。

コオロギは中国各地の都市住民によって、闘コオロギという遊戯・競技に用いられてきた。そしてコオロギの繁殖・獲得から個体識別、飼育、闘技など細部にわたって精緻で多様な民俗知識が保持されてきた。そこではコオロギは、あるがままの生き物としてではなく、人の手によって作り上げ、完成されるべき生き物として扱われている。

私は、このコオロギ飼育文化から、人間による自然への干渉、介入が本来的に否定されるものではなく、支配し、管理することがむしろ望ましいとする、中国漢民族の自然観の存在を推測している。闘コオロギの文化は、山水画に代表される絵画や工芸など、人工的な芸術に自然を取り込む「芸術の自然化」と表裏一体であると考えられ、「二義的自然の構築」、あるいは「自然の工芸化」としてとらえられる興味深い素材なのである。